

令和3年度入学（一般選抜 後期日程）試験問題の出典

社会福祉学部

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	一	好井 裕明	「今、ここ」から考える社会学	筑摩書房, 2017年より pp.90-96,	筑摩書房

令和3年度 一般選抜・後期

社会福祉学部

小論文 (90分)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、2ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 200 点)

「自分自身の場合、親や友だちとの連絡、動画鑑賞、ゲームアプリ等の娯楽が不可欠な役割です。(中略) SNS は友だちでも知人でも知人ではない人でも誰とでもネットを通してつながることができます。僕はちなみにスマホを使って4年目なんですけど、使い始めの頃はというと『絶対、LINE は業務連絡しかしないよ』なんて親や友だちに言ってました。それから4年たち、気づけば僕にとってLINE は友だちとつながる絶好のアプリと化しました。→情けない！ (中略) つまり僕の心の中に誰かといつもつながっていたい、孤独な状態はいやだ！ ひとりはいやだというような感情・考えが不可欠なものにしてしまったから、SNS が使えるスマホがあたりまえのものになったのだと僕は思います」

私は、大学の講義でスマホ依存について話すことが多いのですが、ある男子学生は講義内容をうけて、レポートにこう書いていました。彼にとって、スマホは「あたりまえ」のものであり、LINE などのソーシャルネットワークサービス(SNS)を使って、つねに親しい人や知人、知人ではない人につながるための重要なメディアなのです。

ゲームや動画鑑賞は、時間つぶしか暇つぶし、趣味の時間の延長線上でスマホとつきあっていると考えることができるでしょう。しかし、SNS を使って誰かとつながっていないと「孤独」であり、「孤独」はいやだ、という感情をもたざるをえなくなったというのは、まさにスマホが彼にもたらした固有の新たな「生の状態」だと思うのです。

LINE は確かに「業務連絡」するには、便利なツールです。ある集まりのなかでの情報伝達、情報共有を効率よく達成できると私も思います。「業務連絡」のツールであったはずが、彼のなかで、いつしか、LINE は親しい人、知人、赤の他人とつながるためのツールへと変貌していったようです。もっと言えば、つながるためではなく、「つながっていること」自体を確かめるためだけの、「つながっていたい」という意思や感情を確かめるだけのツールへと変貌していったのでしょう。

誰かとつながっていたいと思いLINE を使うとき、私たちはどのような話を相手にしているのでしょうか。別に大した話ではない、ただの雑談だし、いちいち覚えているほどの内容ではない、という返事が聞こえてきそうです。そんな長い文章は書かないし、面白いスタンプがいっぱいあるし、スタンプをうまく使えば、相手にいちいち言葉を使わなくても、自分の気持ちは伝わるし。こんな返事も聞こえてきそうです。話の中身じゃないよ、LINE でやりとりすること自体が面白いし、意味あることなんだ。こんな返事も聞こえてきそうです。いろいろな返事の可能性を考えていると、私のなかで「井戸端会議」という言葉が浮かんできました。

「井戸端会議」とは何でしょうか。近所に住んでいる奥さんたちが、井戸端に集まって、皿を洗ったり、野菜を洗ったり、洗濯したりしながら、雑談し、談笑する。そこにいない人の悪口や噂で盛り上がったり、そうかと思えば、普段の暮らしの厳しさやしんどさを愚痴る、その意味で重い雑談になったりする。いずれにしてもまさに親しい人や知人が集まり、つながる場であり、語り合うという実践でした。

「でした」と私は過去形で語っていますが、まさに過去の情景と言えるでしょう。なぜなら私たちの日常生活で、もはや「井戸」はあたりまえのものではないのです。でも私が子どもの頃であった昭和の時代までは生活の場に「井戸」は存在しました。炊事や洗濯など生活に必要な水を得るために、近所の人々は「井戸」を共有し、「井戸」を活用しました。当然のごとく、そこには人々が集まることになり、語り合いが生まれたのです。

(中 略)

このように書いてきて、私は別に LINE でのやりとりがだめだと言いたいわけではありません。問題はやはり先の男子学生がわかっているように、LINE というツールが他者との「つながり」それ自体を確認するために使われていることであり、ツールに自分自身が^{とら}囚われ LINE での「確認」に依存しないと他者との「つながり」を実感できなくなっている身体になっていることであり、また他者とどこかで「つながっていない」こと自体が「孤独」だと思い込んでしまっている姿なのです。

男子学生に私はこうたずねてみたいと思います。いつも何らかの形で他者と「つながって」いないと、本当に「孤独」なのでしょうか。LINE でやりとりすることであなたは本当に他者と「つながっている」と実感し安心しているのでしょうか。SNS を通した他者との「つながり」はあなたに「孤独」ではないどんな心の状態をもたらしているのでしょうか。そもそもあなたがイメージしている「孤独」とは、どのようなことをいい、他者との「つながり」とはどのような関係性のことをいうのでしょうか、等々。とりあえずこのあたりでやめておきますが、もっといろいろな形で問いかけることができます。

こうした問いに対して、私たちは、どのように考えていけばいいのでしょうか。はっきりしていることがあります。LINE にせよ、ツイッターにせよ、インスタグラムにせよ、ましてやスマホにせよ、それらは、あくまで便利な情報発信、情報収集、情報流通の技術であり道具にすぎないということです。こうした技術や道具に意志はありません。LINE が意志をもち、自分をないがしろに使った人間たちを「孤独」にしてやろうと考えれば、それはそれでなかなか怖いことだと思います。

問題は、やはりこうした道具を私たちがいかに使いこなすかであり、使いこなしの背後にある他者理解、他者とのコミュニケーションをどう考えるのかということなのです。

(好井裕明『「今、ここ」から考える社会学』、筑摩書房、2017年、pp.90-96より、一部改変)

問 1 LINE と井戸端会議との違いはなにか。本文の内容を踏まえて、200 字以上 230 字以内で説明しなさい。

問 2 SNS を使って、他者理解や他者とのコミュニケーションをとることについて、SNS の特徴を踏まえて、あなたの考えを 600 字以上 800 字以内で述べなさい。